

1 味の素株式会社

	各社の考え方
<p>□ 算定を行う背景・目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 温暖化ガス総排出量を「見える化」することにより、事業の全体像を把握し、長期戦略の策定に役立てるため。また、ステークホルダーの事業の情報開示の要求に応えるための情報を整備する。 ● 商品ごとのLCAを計算することにより、商品の環境影響の状況を見える化し、商品改定の方向性や新規技術開発の方向性判断の素材とする。 ● 代表的商品のLCAでのGHG排出量を精査し、それらの商品を製造販売した際のGHGの総和を外挿し、事業のGHG排出量を算定する方針をとる。 ● LCA算定済の13商品については、その算定結果の妥当性について第三者の限定的保証を受けている。
<p>□ 算定結果の活用方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 商品開発・技術開発に役立てる。 ● 社内での長期戦略目標を設定する際の基礎情報として用いる。 ● 機関投資家による格付け評価に活用する。
<p>□ 算定のメリット</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 商品・事業において、サプライチェーンのどの部分の環境負荷が大きいのかを把握できるため、次の戦略を立てるための素材となる。 ● 何に取り組むべきか、対象が明確にできる。
<p>□ 社内の算定体制</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体取りまとめ：本社 CSR部門 ● 商品のLCA計算：本社 CSR部門 ● 情報提供：各事業部門、海外含む連結子会社、工場、サプライヤー

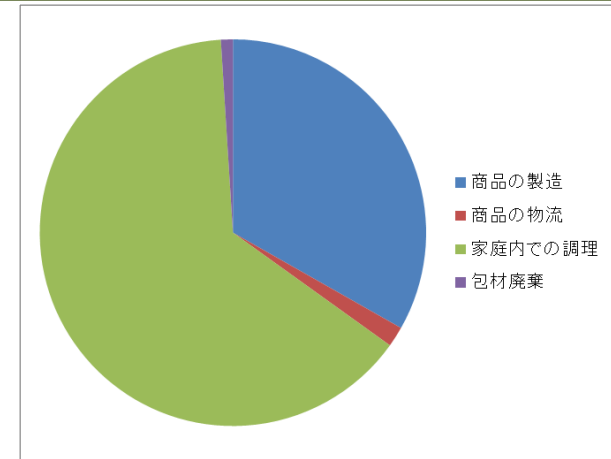
2

味の素株式会社

各社の考え方

□ サプライチェーン
排出量の削減に
向けて

- 右に例として一つの商品カテゴリーのLCAでのGHG排出量のグラフ例を示す。
(商品カテゴリーにより比率が大きく違うため、事業の総和は解析に活用しにくい)
このカテゴリーの場合、全体量の半分以上が家庭内での調理時に発生することがわかる。
よって、自社の生産での効率化を進めるとともに、「エコうまレシピ®」の紹介など、家庭内の調理において環境負荷を下げるような取り組みを推進する必要を感じている。



□ サプライチェーン
排出量算定の課
題

- サプライヤーの製造工程から排出量が、我々の製造工程の精度ほどには把握できない。ほぼ、PCRを用いた推計値になってしまう。
- CFP_CP制度の基本データベースにおける、農産物のアイテム分類が粗すぎる。
- 原料産地となるアセアン地域の農産・水産物のアイテム数が充実するとより正確にできる。

□ その他(任意)

- 2016年度実績より、算定対象を「味の素グループ全体」の事業としている。

3 味の素株式会社

カテゴリ	算定方法	
	活動量	原単位
カテゴリ1「購入した製品・サービス」	● 原料生産はPCRを用いて算定	● 重量当たり原単位
カテゴリ2「資本財」	● 年間設備投資額から算定	● 3EIDベースの金額当たり原単位
カテゴリ3「Scope1,2に含まれない燃料及びエネルギー活動」	● Scope1,2の燃料およびエネルギー活動の使用量から算定	● エネルギー量当たり原単位
カテゴリ4「輸送、配送(上流)」	● 当グループ生産工場と配送元または配送先の実査距離と輸送量を基に算定	● トンキロ法
カテゴリ5「事業から出る廃棄物」	● 各事業所で廃棄した量を基に算定	● 重量当たり原単位
カテゴリ6「出張」	● 従業員数を基に算定	● 従業員当たり原単位
カテゴリ7「雇用者の通勤」	● 従業員数と年間標準営業日数を基に算定	● 従業員数・勤務日数当たり原単位
カテゴリ8「リース資産(上流)」	● リースによる使用はScope1, 2に含む	
カテゴリ9「輸送、配送(下流)」	● 事実上ほとんどないので、ゼロ	
カテゴリ10「販売した製品の加工」	● 納入品が排出削減に貢献しないのでゼロ	
カテゴリ11「販売した製品の使用」	● 製品の使用に関して標準的な調理方法を基にエネルギー量を算定	● 重量当たり原単位
カテゴリ12「販売した製品の廃棄」	● 製品の包材重量を基に算定	● 重量当たり原単位
カテゴリ13「リース資産(下流)」	● 事実上ほとんどないので、ゼロ	
カテゴリ14「フランチャイズ」	● 事実上ほとんどないので、ゼロ	
カテゴリ15「投資」	● 事実上ほとんどないので、ゼロ	
「その他」	● 該当なし	

4

味の素株式会社

算定結果

● サプライチェーン排出量

